“新時代テレビ”
～いま、ドラマ・バラエティ制作者 666 人は～
報告書作成にあたって

放送と青少年に関する委員会委員長　汐見稔幸

本報告書は BPO の青少年委員会が 2011 年の夏に実施した調査のまとめです。

青少年委員会の日頃の会議では視聴者からの番組への意見を検証することが大事なテーマになりますが、しばしば制作現場でスタッフが視聴者の意向をどう意識して番組制作をしているのかが話題になります。他の委員会でも同じではないかと推測します。今回の青少年委員会の調査では、直接このことをテーマに取り上げようということになりました。テレビ局の最前線でドラマやバラエティ番組を制作しているスタッフに、さまざまな角度から制作者としての意識を直接聴いてみたのが今回の調査です。おそらくこれだけの数の現場スタッフを対象に、制作にかかわる人間として日頃どういう意識で番組を制作しているかを、このように具体的にかつ細やかに明らかにした調査は初めてではないかと思われます。結果をぜひていねいに読んで、ご感想とご批評をお願いいたします。

制作現場で制作者は制作費や視聴率のことは気になっても、制作する番組が視聴者にどう受けとめられているか、また青少年にどのような影響を与えているかをいつも細やかに勘案して番組をつくるわけにはいかないでしょう。しかし、視聴者のことを全く考えないで番組をつくることもできるはずがありません。このふたつの関係は、局によっても、年齢によっても、また番組内容によっても、微妙に異なっていることが今回の調査で浮かび上がりました。

文学批評の世界には読者論という方法があります。すぐれた文学であるかどうかは、そのときどきの読者が決めるのであって、文学を創作する方ではないということを徹底し、文学世界における読者の位置を思い切って高めて文学を論じる方法です。宗教でも、創始者がすぐれた宗教者であるかどうかを決めるのは常に周囲の者であって、創始者ではありません。宗教の場合も聴く者が主体であり教団をつくるのも常に信者＝聴く者でした。

テレビの場合、まだ始まって半世紀少ししか時間が経っていませんので、視聴者と制作者の関係がどう具体的につくられていくか、ある意味で実験段階といえるのかも知れません。今回の調査では、たとえば 20 代の若い制作者が、制作そのものに必死で、視聴者など周りを十分見るゆとりがないことが浮かび上がっていますが、彼ら・彼女らが、これからどう視聴者を意識していくようになるのか、その上で如何に個性的な制作者となるのか興味深い論点になっています。

いずれにしても、テレビにもラジオにも、それを「よい！」と評価するのは視聴者であるという単純な真理からわれわれは逃れることができません。その意味で、文学における読者論的な批評の方法がマスコミにも必要になっていくことは確実です。それが不十分ないし未確立であると、テレビの将来は危ういかも知れません。今回の調査結果を、ぜひ多角度から検討していただくことを期待しています。

目　　次

▲ 「報告書作成にあたって」
放送と青少年に関する委員会委員長　汐見稔幸

▲ 第１部　いま、ドラマ・バラエティ制作者 666 人は
・調査結果の概要 …… i
１　調査の目的と方法…… 1
２　放送局に就職する前の活動状況とテレビ視聴…… 5
３　現在の仕事や職場環境に対する評価と生活状況…… 11
４　テレビ放送の現状認識…… 17
５　テレビが視聴者、特に青少年に与える影響…… 32
６　視聴者意見との接触状況、視聴者意見に対する評価、視聴者のイメージ…… 46
７　視聴率の捉え方、番組の制作状況や心構え…… 62
８　今後のテレビ放送の姿、将来像…… 74
９　ＢＰＯに対する認識と評価…… 82
10　調査の全体像の検討…… 88

▲ 第２部　ドラマ・バラエティ制作者グループインタビュー
～いま、制作現場で思うこと～
１　尊敬すべき先輩像…… 96
２　私はだからテレビをめざした…… 99
３　視聴率　9.9%と 10%の間 …… 105
４　ＢＰＯについて…… 107
５　テレビ制作者のいまとこれから…… 109

▲ 第３部　テレビ制作者たちは、東日本大震災をどう見たか？
１　制作者アンケート全文…… 113
２　報道関係者は…… 169
・資料　番組制作者、視聴者アンケート質問票…… 175